



自治医大卒業生で皮膚科を目指すということ

☆推薦文☆

No Job is Finished Until the Paperwork is Done.

後輩たちに伝えているメッセージの一つです。

そして彼が、当科のライジングスターです。

皮膚科学講座 神谷 浩二

茨城県西部メディカルセンター 皮膚科

角 総一郎 (茨城県 36期卒業)

今回、卒業生の先輩である神谷 浩二先生（愛知県30期、皮膚科学講座准教授）のご指導のもと、原著論文、“A single-center survey of biologic use for inflammatory skin diseases during the COVID-19 pandemic”がJournal of Dermatologyに、“GATA-binding protein 3 and gross cystic disease fluid protein 15 as a potential diagnostic marker for extramammary Paget’s disease.”が、Journal of Cutaneous Immunology and Allergyにアクセプトされました。今回、機会をいただいたため、同じような境遇にある在學生や卒業生に何か伝わればと思い、今自分が考えていることを述べます。



現在、私は医師9年目で自治医大卒業生皮膚科医として未来を切り拓くために奮闘しています。自治医大を卒業し、皮膚科医になることは簡単ではありません。今では新専門医制度もはじまり、県によっては皮膚科医になる選択肢が消されている県もあります。茨城県の場合にも、卒業生皮膚科医は1期生の平本 力 大先生の他にはおらず、皮膚科医になりたいことを口にするのも勇気のいる環境でした。専門医試験も、義務が明ければ受験できません。そんな中でも、皮膚科医になるために、地域でできる貴重な仕事があります。それは論文作成です。地域における論文作成の重要性を、自分の経験を踏まえて述べます。

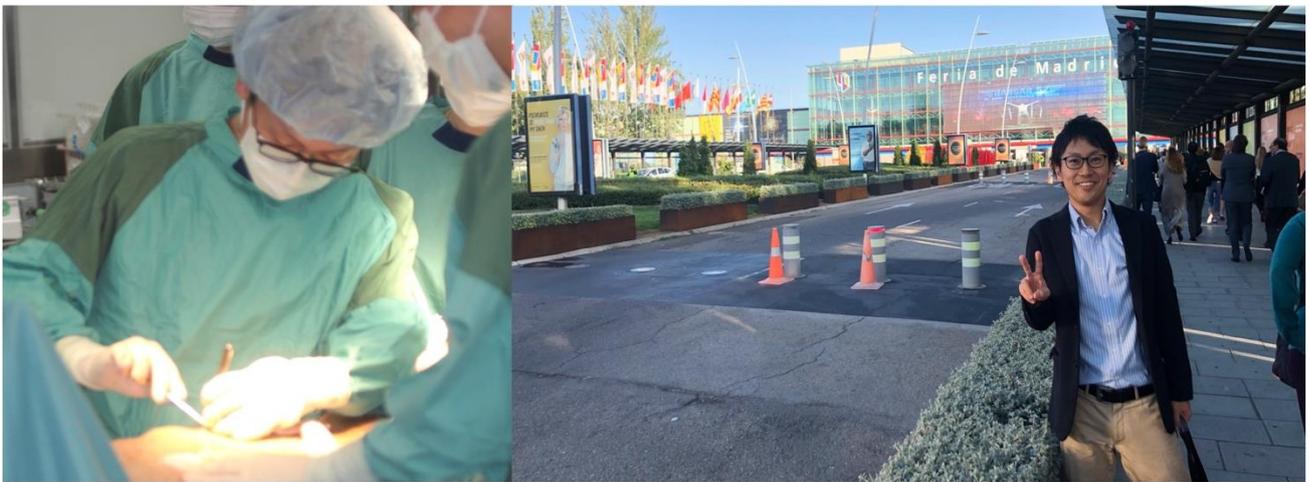
自治医大卒業生にとって、最も苦勞するタイミングの1つは、地域にでて1年目の頃だと思います。なぜなら、それまで大きな研修病院で守られて過ごしていたところで、突然1人前の医師として扱われ、自分の判断が患者さんの命に直結し、その責任をとる立場になるからです。私は茨城県立中央病院で2年間の初期研修を行った後、北茨城市民病院内科で3年間勤務しました。自治医大に入学する前から皮膚科医になることを決めていたため、6年生で皮膚科セミナーをとり、そこで大槻 マミ太郎教授をはじめ、自治医大皮膚科学講座の皆様に触れ、皮膚科医になる決心を固めて卒業しました。しかし、初期研修から地域にでて1年目で、その決心は大きく揺らぎました。地域の現場にでると、現場毎に、求められている仕事は異なります。私が地域にでて1年目の時に、自分に最も求められていた仕事は、内科一

般診療と、少々の循環器内科診療であり、皮膚科医を目指している自分にとって当初は葛藤がありました。しかし、目の前に困っている、症状のある患者さんがいるのを差し置いて皮膚科医になっても良い気分はしないと思い、とにかく、目の前の患者さんのために全力で仕事をすることにしました。今思えばこの時期も自分にとっては非常に重要で、「自分の専門分野に固執するのではなく、地域で求められる医療を行うことこそが、地域医療にとって重要」だとも思います。ちょうど医師が少ない時期でもあり、とても皮膚科を勉強する時間はなく、研究日があったものの、はじめは皮膚科の勉強はほぼできず、皮膚科と関わるのは、時折参加する学会くらいになりました。このまま内科医になった方が楽なのではないか、と思うこともありましたが、そんな中、皮膚科医への熱意を復活させてくださったのが、神谷先生でした。卒業生として、上部、下部消化管内視鏡を経験しながら、義務年限内に岡山大学の皮膚科の学位を取得し、自治医大に戻ってくる予定という連絡をご本人よりいただき、そんなことができるのかと、希望が湧きました。それ以来、内科業務を行いつつ、研究日には、片道2時間近くかけて自治医大に行き、朝から晩まで皮膚科の診療に取り組み、勉強しました。通い始めると、現在でも大変お世話になっている前川 武雄先生（自治医大皮膚科学講座准教授）より手術や悪性腫瘍について学び、下肢静脈瘤の血管内治療等にも触れました。普段やっていた心臓カテーテル検査等の内科業務との関連性が見え、よりやる気が出るようになりました。また、通い始めて2年目には、有言実行で神谷先生が自治医大に戻られ、研究についても少しずつ教えていただきました。乳房外パジェット病の研究についてはこの頃からはじめ、論文アクセプトまでに5年かかりました。自治医大で診療、研究に取り組むと、茨城に帰る時間は日を跨いでいることも多々ありましたが、今ではこの地域の3年間で頑張った本当によかったと考えています。地域での3年間で終了すると、自治医大で皮膚科医として2年間の後期研修をさせていただきました。後期研修中には、地域にいる間で学んだことを活かしながら、馬車馬のように皮膚科の臨床に取り組ませていただきつつ、国際学会（European Academy of Dermatology and Venerology; EADV）での発表等も経験させていただきました。また、自治医大での後期研修中に、病院長賞を受賞しましたが、これは自治医大皮膚科スタッフの皆様のご指導はもちろんのこと、地域で、卒業生の先輩方からご指導いただいた「患者中心に物事を考えること」「患者さんのために他科やスタッフに頭を下げることを実践できたことも関連したと思っており、お世話になった茨城県卒業生の先生方にも本当に感謝しています。現在は、後期研修が明け、茨城県西部メディカルセンターにて、皮膚科医として勤務させていただいています。

このような自分の経験の中で、論文作成は、自分の皮膚科医人生を大きく支えてくれました。正直、皮膚科医を目指すと言って地域に出ても、実力が全く伴っておらず、内科の力の方がずっと伸びていきました。研究日に自治医大に通いはじめても、まだまだ経験が浅く、地域の皮膚疾患に自信をもって対応できませんでした。皮膚科関連の論文を書くことは、そんな中でも自分が皮膚科医をやっているという実感を与えてくれる時間であり、自分にとってはとても大切な時間でした。論文は、形にして結果を出すことがとても大切だと思います。なぜなら、自分の仕事を形に残すことで、自分がその期間に頑張っていたことを世界に証明することができるからです。逆に、何も残さないと、思い出だけになってしまいます。ただ、論文で結果を出すのは、本当に大変なことです。私はこれまで神谷先生をはじめ指導医の先生に恵まれ、英語論文ではCase reportを4本、Original Articleを2本、筆頭著者としてアクセプトいただきました。決して大きな業績ではありませんが、それでもどれも苦労したものばかりでした。論文を書くたびに、指導医の先生の結果に対する情熱を目の当たりにし、学ぶものが多々ありました。結果に対して情熱をもって取り組むことは、臨床にも共通する、重要なことだと思います。

まとめると、やりたい分野を諦めず、結果を出すために努力することが重要だと思います。自分は自治医大卒業生の縛りがあり、まだ皮膚科の専門医も受けられませんし、学位もありません。現

在9年目ですが、後期研修がカウントされないため、あと2年義務年限があり、この期間は皮膚科医として働けるかもわかりません。しかし、このまま諦めずに、胸を張って皮膚科医として生きていくつもりです。



地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープンラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7476/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<https://grad.jichi.ac.jp/>